

品種特性

第1図に3品種の草姿イメージがあります。「Vロード」と「夏のめぐみ」「夏ばやし」の側枝の雌花性の違いに注目してください。「Vロード」は、側枝に雌花が連続的に着生しやすい品種、「夏のめぐみ」「夏ばやし」は、連続雌花がやや少ない品種になります。

では、これら3品種の収量の変化はどうでしょう。3品種いずれも収量の高い品種ですが、第2図から収量の変化に違いがあることが分かります。

「Vロード」が平均的に安定した収穫が続くのに対し、「夏のめぐみ」「夏ばやし」は早生で、初期から多収になっています。

この収量変化は、雌花着生の多さで収量を上げる「Vロード」と、果実の肥大・回転の早さで収量を上げる「夏のめぐみ」「夏ばやし」の品種特性の違いといえます。

以上のような特性をふまえた上で、次ページに各品種の特長に合った栽培管理を紹介します。

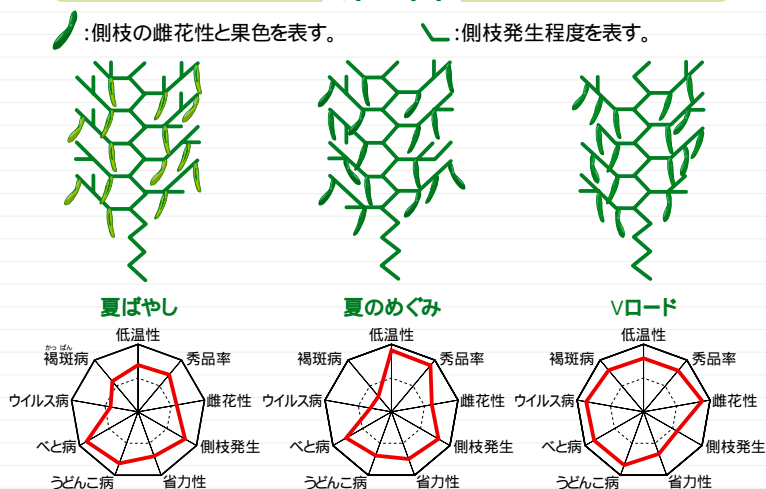
タキイ 夏秋キュウリ

「^{フィ}Vロード」 「夏のめぐみ」 「夏ばやし」の 管理技術

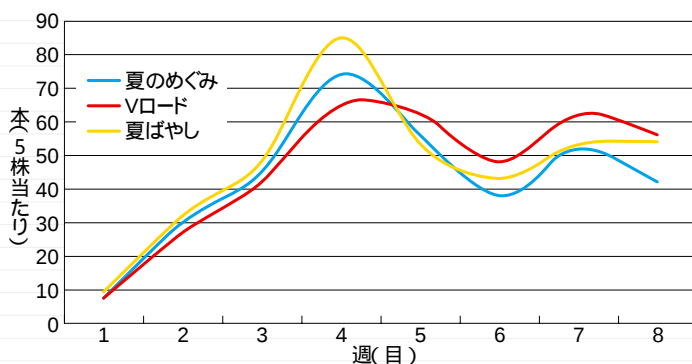
タキイ研究農場

新 久紀

第1図



第2図 週毎収量変化例



タキイの夏秋キュウリは、「夏すずみ」の発表以来、
耐病性・高秀品率・省力性を持つことから、
日本各地で好評をいただけてきました。
今回は、特に使用頻度が高い「^{フィ}Vロード」「夏のめぐみ」
「夏ばやし」の品種特性に沿った管理の方法を中心に
解説しますので、
今後の参考にしていただきたいと思います。

「Vロード」と「夏のめぐみ」「夏ばやし」で変える栽培管理

①側枝の整枝方法

「Vロード」は側枝に連続的に雌花が着生するので、腰の高さより上の側枝は2葉摘芯にし、側枝の雌花性を生かして収量を上げていきます。注意が必要なのは、高い雌花性が主枝にも共通する、という特性を持つ点です。東北などの冷涼地では、定植直後の時期は夜温が低く、より雌花の着生が促される状態にあります。栽培中にぜひ、主枝の中段以降の雌花着生具合を確認してください。各節に雌花が着生しているようであれば、雌花のある節が半分程度になるよう、雌花を除去するようにします。

この「主枝雌花数の調整」により、中段以降の側枝発生が良好になるので、「Vロード」の山谷のない収穫パターンがより安定して続くようになります。

一方、「夏のめぐみ」「夏ばやし」は、側枝の1葉摘芯を基本とします。ただし、連続的に雌花が着生している側枝は2葉摘芯にしても問題ありません。摘芯することで果実の肥大がより促進されるので、「回転の早さ」で収量を上げるこの2品種には、生長点が小さいうちに摘芯する整枝方法がより有効です。

②孫枝の管理

「Vロード」は側枝を2葉摘芯し、孫枝も発生が良好なため、アーチ内が込みあわないよう適宜摘芯する必要があります。具体的には、アーチ内外に伸びた孫枝は、枝が垂れ下がらないよう、1葉もしくは2葉で摘芯します。また、両サイドに伸びた孫枝は、隣の株とのスペースを有効に利用し、込み具合を見ながら随時摘芯してください。

「夏のめぐみ」「夏ばやし」は、摘芯→果実肥大・枝発生→摘芯→果実肥大・枝発生のサイクルをスムーズに続けていくことがポイントです。したがって、込み具合と樹勢を見ながら積極的に摘芯をし、果実肥大と次の枝発生を促進させてください。

下段の孫枝は、3品種とも1葉摘芯にし、孫枝の果実が収穫できた時点で側枝ごと切り戻してください。

③追肥について

もう一度第2図を参照してください。3～5週目に注目します。側枝の収穫の始まりが早く、一気にとれ上がる「夏のめぐみ」「夏ばやし」では、急激に収穫量が増えているのが分かります。特に4週目には、10aに換算すると1.2～1.5tにも達しています。追肥は週に1回チッソ成分で10a当たり3kgが基本ですが、これはあくまで目安です。この2品種の収穫最盛期には、基本の追肥量では樹勢を維持できないと考えてください。

かといって、1回の追肥量を増やすことで対応すると、後述する強整枝とともに短果を助長することにつながるため、おすすめできません。労力はかかりますが、粒状肥料ならチッソ成分を2kgまでにとどめ、4～5日おきに追肥するなど、回数でカバーするようにしてください。

なお、降雨前後の追肥、追肥後のチューブによる灌水などで肥効を高めることも必要です。また液肥の場合は、チッソ成分で500g～1kgを2～3日おきに、灌水も兼ねて流すようにしてください。

整枝方法

「Vロード」の場合

- ・主枝の摘芯は早めを心掛け、手の届く高さ(25節前後)で行う。
- ・中段以降の側枝は2葉で摘芯。
- ・孫枝以降は適宜摘芯とし、常に3～4本力強い生長点が残るように管理する。
- ・下位節、8～10節目(腰の高さが目安)までの側枝・孫枝は1葉で摘芯。
- ・6～7節(地面からおおよそ30cmが目安)までの側枝や雌花は早めに除去。



↑ 中段以降は2葉で摘芯。



↑ 8～10節目は1葉摘芯とする。

整枝方法

「夏ばやし」「夏のめぐみ」の場合

- ・主枝の摘芯は早めを心掛け、手の届く高さ(25節前後)で行う。
- ・側枝は1葉摘芯を基本とする。
- ・孫枝も1葉摘芯とし、3～4本は草勢を見て残す。



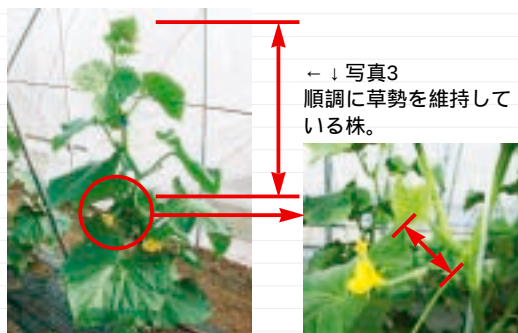
↑ 株元から6～7節までの雌花、側枝を除去。

3品種に共通のポイント

【草勢判断】

・草勢判断は本葉15～18枚程度（8～10節の開花ごろ）に行う。目安は（写真3参照）

- ①開花節から生長点までに、展開葉が5～6枚あれば順調。それ以下なら弱い。
- ②開花節から発生している側枝の長さが小指以上なら順調。それ以下なら弱い。
- ③上記2点を満たしても、発生している側枝が急に小さくなっているようなら、草勢は弱くなりつつある。
このような場合には、着果節位を1～2節上げる、力枝を伸ばすなどで対応する。



・初期から強勢に作る

今回の3品種に限らず、タキイの耐病性品種上作のポイントは、初期より樹勢を強く作ることにあります。収穫開始時期までには以下の4点を心掛けてください。

- ▶本葉2.5～3枚の若苗定植
- ▶側枝の摘芯は生長点が小さい時に行う
- ▶樹勢の弱い時は、着果節位を上げる（8節目以上）
- ▶主枝の摘芯は、手の届く高さで

「側枝の摘芯」は、摘芯しようとする節間が手のひらに収まる長さまでの、小さい生長点の時に行ってください（写真1、2参照）。側枝を十分に伸ばしてから、ハサミで摘芯するような整枝方法（強整枝）は、タキイの夏秋品種には不向きです。また、主枝の摘芯もアーチの反対側まで伸ばすようなことはせず、早め（手の届く高さ）に主枝を止めるようにします。

樹勢を強くするための管理をすると、収穫始めには果実がクサビ状の尻細果になることがあります。最初の1～2本が尻細果になるようなら、初期から樹勢を強く保てたサインです。そのような樹勢であれば、通常中段以降の側枝も順調に発生するので、初期からの多収が期待できます。

果形は収穫本数が増え、着果負担が大きくなってくれば安定してきますが、側枝の果実まで尻細果が改善されないようであれば、追肥の開始時期を遅らせます。1本目の果実がとれ始めた時期ではなく、側枝の果実の果形が安定したのを確認してから、追肥を始めてください。

ワンポイントアドバイス ～キュウリ果実のまがり～

多くは一時的な水や養分の不足が原因
不足なく供給 一時的に不足



果実は三組織が融合したもの



対策

- ・定期的な追肥、灌水。
- ・草勢低下時に強整枝、摘葉をしない。
- ・過繁茂にしない。
- ・奇形果は小さいうちに摘果し、草勢回復を図る。

【整枝のタイミング】



↑写真1

×：側枝を伸ばしてからの摘芯はしない（ハサミを使っての摘芯不可）

↑写真2

○：生長点が小さいうちに摘芯する（手でつまめる大きさのうちに）

【キュウリ尻細果】

主な原因

- ・低温、チッソ過多（収穫初期）。
- ・草勢が強すぎる。
- ・草勢低下（収穫最盛期以降）など。

対策

- ・慢性的な場合は元肥、作型の見直し。
- ・訪花昆虫（ミソバチなど）による受粉。
- ・追肥、灌水など適切な肥培管理。

